

自由論題セッション B 報告要旨

【司会】後藤雄介（早稲田大学）

【報告】

笠井俊和（名古屋大学博士課程）「17世紀末北米植民地の船乗りと西インド貿易—大西洋史の視点から—」

福田敬子（青山学院大学）「奴隷制廃止運動と健康改革運動—アフリカ系アボリシヨニスト David Ruggles のユートピア—」

三浦順子（北海道大学大学院博士後期課程）「アメリカで『メキシカン』として生きるという試み—テキサスにおけるメキシコ系アメリカ人およびメキシコ人移民の組織活動、1910-1929年—」

吉岡宏祐（東北大学博士後期課程）「現代アメリカ合衆国におけるアフターマティブ・アクション廃止論争—高等教育機関の事例を中心にして—」

本セッションは自由論題ということもあり、時代もテーマも異なる4報告がなされたが、個別的な分析の掘り下げとは別に、普遍的なテーマへと連なる論点もまた提起されており、多様なオーディエンスの興味・関心に応えるまとまりを獲得できたように思う。

笠井報告は、これまで「読み物」として消費されてきた「船乗りの歴史」を社会史的考察の対象に転換し、商船の出入りを記録した海事局船舶簿を綿密に分析することで、17世紀末のボストン—ポートロイヤル（ジャマイカ）間のひととモノの動きを明らかにした。そこから浮かび上がってきたのは、「現代の我々が思い描くような冒険的な船乗りのイメージとは異なり、比較的近距離の貿易に従事する者たち」の姿である。大西洋史という大枠の分析の前提として必要とされるのが、本報告のような地道な作業であることを認識させる内容であった。

福田報告は、19世紀中葉のニューイングランドの小都市ノーサンプトンにおいて、自由黒人のデイヴィッド・ラグルズと彼のもたらした「水療法」が、「ノーサンプトン教育産業協会」に集う当地の進歩的知識人に受容される過程を描き、「自分の体を自分でコントロールする権利」を目指すという点において、奴隷制廃止運動と健康改革運動との思想的つながりを見出した。フロアより「歴史学的な実証に欠ける」との指摘も受けたが、文学研究からの果敢な問題提起であり、必要とあれば実証作業を引き受けるは歴史研究の側の責務であろう。

三浦報告は、予告されていた内容とは異なり、1920年代テキサスにおいて盛んに論じられた「メキシコ人問題」において、おもにメキシコ系を排除するテクサン（白人テキサス住民）の側に注目し、ジェームズ・E・ファーガソン州知事の言説・政策のなかにメキシコ系を「非アメリカ化」する論理を析出するものだった。フロアから「排除されるメキシコ系側の立場はどうだったのか」

との質問があったが、それに対しては、じつは本来予定されていた報告が応えられるはずであったが、その成果は別途『北大史学』（47号、2007年）に掲載されていることを、ここに記しておく。

吉岡報告は、現代史の最前線のトピックであるアフターマティヴ・アクション（A.A.）をめぐる論争を対象とし、A.A.廃止運動の拡大において重要な役割を演じてきたウォード・コナリーに焦点を絞り、これまで十分に分析されてこなかった彼の思想的側面に注目して分析を進めた。その結果明らかにされたのは、「リバタリアニズム思想を体現するコナリー」という人物像であった。フロアからは、「思想史のみに注目するだけでは不十分で、政治史との関係にも配慮すべきではないか」との趣旨の助言があったが、膨大な資料を精緻に分析したその研究姿勢は高く評価しうるものであり、上記助言を踏まえ、今後さらなる発展を期待したい。

惜しむらくは、4報告のどれについても質疑応答の時間が十分に確保できなかったことである。午前のセッションとしては、やはり3報告が望ましいように思う。

（後藤雄介）